

「現代米国における政党変容のメカニズム : 共和党の保守化、民主党の中道化」

久保文明教授 比較現代政治研究会 (東京大学法学部 1 1/2 2/2 0 0 3)

米国における政党変容のメカニズムについて、特に近年の共和党の保守化について、政党指導部と利益団体の連合が主導する政党の性格変化を強調する分析を行った。

近年の共和党は、決定的選挙を経ずしてその性質を変容させつつある。1960年代以降、穏健派が次第に衰退していき、ゴールドウォーター、レーガンらが台頭した(レーガン主義の台頭)。ただし議会共和党における保守化は遅れ、ギングリッジらの Conservative Opportunity Society が、のちの「アメリカとの契約」の先駆となるような活動を1980年代前半に開始したものの、保守派の優位はようやく1980年代末になってから見え始めたに過ぎない。1994年の中間選挙での勝利において、遅ればせながら保守派の優位は固まったといえよう。そのメカニズムは以下のように要約できる。

彼らは選挙の際に統一メッセージを作成し、保守派の候補者訓練機関である GOPAC の支援を受けた。また、Christian Coalition などキリスト教保守派の団体やよる組織的動員が拡大し、共和党内で影響力を行使する一方で、Americans for Tax Reform などの経済的保守派の動きが目立つようになった。なおかつ両者は徐々に共存・共闘体制を組み始めた。いわゆる宗教保守と経済保守の接近である。両者以外にも、中小企業団体、銃所持者団体、在宅教育者団体など、保守系の団体のいわば大同団結が1993-94年に起きている。ATRで開始された「水曜会」はこのような協力関係の制度化を象徴している。こうした流れの中で、政党と利益団体の関係が固定化し、党派化していった。

これに対して民主党も GOPAC をモデルに New Democratic Network を設立し、穏健派リベラルとしての運動を制度化させつつあるが、共和党に比べた場合このような連合形態は以前少数派にとどまっており、また集团的基盤において弱体であるといえよう。

結論的には、近年のアメリカの政党の変化を理解するためには、政党指導部と政党を支援する政治運動・政治団体との関係を十分視野に入れたモデルを構築することが必要であると考えられる。